

言葉が蘇^{よみがえ}っていくとき

ICLC国際識字文化センター 田島 伸二^{たじま しんじ}

あるとき、パキスタンの田舎の小学校で、子どもたちから紙をねだられたことがある。子どもたちは手に石版を持っていたので、「読み書きには紙よりも石版がいちばんだよ。」と話す。子どもたちは、「石版では文字が残せない！」と言いつ返し、「絵も残せないし、日記も書けない。全部消えてしまつ。」そこで私は、ノートを送るというやり方ではなく、彼らの自立も考え、現地にあるサトウキビやバナナの葉を使って、手漉^すきによる紙作りを教えた。一年後、子どもたちが、自分たちで漉いて作った紙に文字や絵をかくて表現し始めたときの喜びの顔が忘れられない。それは、インドの低カーストに属する女性たちや少数民族のカラーシャの人々に紙漉きを伝えたとときも同様で、私の確信はさらに深まつた。つまり、自然の中から自分たちの力で紙を漉き出し、それに自由に表現し、記録することは、人間にとっては信じられないほどの驚きと感動をもたらすものなのである。だれしも自分自身を表現して記録したいのだ。

文字の読み書きのできない人々は、いつも必死に人々の話し言葉に耳を傾ける。それは、話し言葉が唯一の情報源であるからだ。しかし読み書きができる人々は、活字の世界や映像の世界もあるので、人々の話し言葉には真剣には耳を傾けない。言葉は、ときに人を傷つけることもあるが、苦悩の中にいる人を元気づけることもある。一方で、言葉は、機能的すぎるとき、つまり手段として使われるときには、言葉の本来の面白さや真実は失われてしまつような気がする。近年、言葉の本来の役割である「人と人とを結ぶ大切なコミュニケーション」が、だんだん忘れられているのではないだろうか。

私はこれまで二十数年間、ユネスコ活動の中でアジア地域の識字教育を行ってきた。そして、現在、「絵地図分析」という新しい自己発見のワークショップをICLCを通じて国内外で開催している。それは、前述の通り、近年、人の言葉を聞くことや特に自分を表現できる言語能力、あるいは文字や絵で伝える表現力など、さまざまなコミュニケーション能力が、子どもや大人たちに非常に希薄になつており、「今、自分はどこにいるのか？何をしているのか？どこに行こうとしているのか？」という「自分探し」を漠然とした不安の中で必死に行っていることを知ったからである。

「絵地図分析」とは、言葉と絵とデザインを使って、自分自身の内面の絵地図を作成するというものである。絵地図に描かれた深刻な煩悶や問題などを客観的にとらえ、それをどう希望に変えていくか、どうやって他人と理解し合つたり、コミュニケーションすることができるか？それを自分の言葉と絵の力で行おうとするのが「絵地図分析」の役割である。誰しも地図の中に自分を発見すると、大きな喜びで創造性を発揮し始める。

もし言葉の未来を考えるとしたら、まず、小さくてもいいから豊かな行為や行動を確実に創っていくことではないかと思う。最終的な言葉とは、「行動」を意味しているのだと思う。つまり、本来の言葉が蘇^{よみがえ}ってゆくためには、裏付けのある言葉、実行性のある言葉、信頼できる言葉など、「真実に裏付けされた実行力」を作り出せるかどうか、言葉によって自分自身をきちんと表現できるかどうか、その鍵^{かぎ}を握^かっているように思える。

田島 伸二（たじま しんじ）

一九四七年、広島県生まれ。一九七七年から二〇〇〇年まで、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）でアジア・太平洋地域の図書開発、識字教育を担当する。現在、NGO国際識字文化センター代表。主な作品に、『さばくのきょうりゅう』『ゆきやま』『講談社』『びくろ星の伝説』『バオバオ・ブックス』『沈黙の珊瑚礁』『雲の夢想録』『蝸牛新社』などがあり、現代の課題を寓話風に書いている作品が多い。英語版『The Lonely Fox』さびしい狐』など三点が、オックスフォード大学出版局から出版され、海外でも多数の言語で翻訳出版されている。